海里の果て

黒霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海里の果て

【Ｎコード】
Ｎ６２２２Ｙ

【作者名】
黒霧

【あらすじ】
ちょっと未来風の世界。人がいなくなり、人に作られた機械は「はて、どうしたもんか」といいながら暇を潰すことにした。　そんな一人である所の僕は、今日も駅で暇してる。あーだれかこないかなー。

孤高の月

白亜の髪。青い瞳。
月を射るように見上げている、一人の少女。

「……ほんと、いつまでそうしてるんだか」

ぼやくのは僕。

息をつけば白いもやがふわりと膨らんだ。けれど冬にふさわしい凍てついた空気は瞬く間に白を消し尽くす。その向こうには錆びた線路と、分厚い布を重ねみたいな不格好な海がある。押し寄せる潮騒に塗れた風は、ほんの少し塩辛い。
そんな景色を、ホームの上から眺めているのが僕の日課。……うーん。案外あの娘と大差ないかも。

「……」

電車はこない。来るかどうかは電車次第。彼らにだって気分がある。かつては勤勉の証書のようだった時刻表は、錆びて崩れてずいぶん経つ。

「……はぁ。わかった、降参」

こらえきれず、歩き出す。足下で身繕いをしていた黒猫が、ばかだにゃーと見上げてきた。うるさいバカで何が悪いといいわけを思いつつ、僕は彼女に歩み寄った。

＊＊＊

「昔、月の美しさを歌うことで、恋を語ったと聞きます。なので、月を見ていれば恋を語れるようになるのかと」

無人の休憩室に招かれた少女は、そう言った。古びた丸い椅子に座ったまま、じっと湯気を上げるカップを見下ろしている。

早く飲めよと内心こぼす。

「今なら、そういうソフトを入れた方が早いのでは？」

「そうですね。よく言われました」

「入れたの？」

「いいえ」

「ふうん」

なら、それが彼女の趣味なのだろう。

現代において、僕たちには無限の暇（時間）がある。趣味は時間を結い意義に潰せる唯一の娯楽だ。

まあ。恋の理解に使うなんてのは、ちょっとロマンがすぎるけど。

「何で恋？」

「わたしを設計者に言われたので」

「ああ……もしかして、結構おばちゃん？」

「そうですね。作られたのは三百年前になりますか。もう主の子孫も誰も残ってはいませんが」

「仕事はなんだったの？」

「孫のお世話をしろと」

「どうだった？」

「整備士にはよくお世話になりました……」

「うはは」

遠い目をする。彼女の記憶は今はどのあたりをさまよっているのだろう。

「で、何故恋？」
「だから設計者に」
「雇い主とは別？」
「はい。わたしは設計者のいたずらでバグを仕込まれました。命題は一つ」

恋を知りなさい。そう、彼女の創造主は告げて。
まるで、間違えた親を猛進する雛のように、彼女は三百年さまよっているらしい。

「その途中で、雇ってもらったのですが」
「野良ドールは外聞悪いからねえ」
「それに整備も必要でしたし。やすいですよーと言ったらカモンと言われて」
「ファンキーな雇い主だったんだね」
「思えば、なかなかにでたらめな方々でした」

それは、そうだろう。人類生存時の記録をあたっても、仮想人格が人間を教育する事を許可した国はどこにもない。

「最後はどういう別れ方を？」
「一族最後の者とは老衰で。子供はいませんでした。もうあのころの人々は子供をほとんどつくりませんでしたから」
「自然消滅かぁ。それじゃあ、財産として差し押さえられたんじゃ？」
「危ないところでした」
「逃げたか」

「もちろんです。……でも」

もしも、あの子が最後まで一緒にいてと言ったら、わたしは死んでもよかったけれど……。

そう言って少女はココアを含んだ。

＊＊＊

白く透き通った光の溶けた、凍った空。

星か人類が消えてから、そろそろ二百年。

求められて生まれた僕たちは、求める物がいなくなった世界で生き方を探している。

「にしたって、しぶといよね」

人の種子は絶えてしまったけれど、よもや彼らの作り出した物々がここまで意地汚いなんて、流石に考えていなかったのではないか。

「さて。そろそろ電車がくるみたいですよ。運がいい」

「最近は駅で待っていても電車がこなくなりました」

ホームにでて、遠くからごんごんとレールを震わせる電車の到着を待ちわびる。

僕は空に向けていた眼をおろすと、彼女に向けた。

「恋の正体は見つかりそうですか？」

「実のところ、もうわたしは体験しているのでは無いでしょうか」

「ほう」

「けれども、うまく認識できないようです」

それはまあ、そうだろう。
恋の正体は無意識であり、それはただ自分がどちらを向きたいかしか意味しないと、聞いている。
であるならば。

「まあ、追いかけてみればいいんじゃないですかね。それでよしと思えるまで」
「そうですね」

そうして。追いかけていった軌跡こそが、いずれ彼女の答えとなるだろう。

……そこで終わりにしてもよかったのだけど。
電車はまだ時間がいるようなので、一つ、歌を教えてみた。
ずっとここにいる僕には歌うことに意味がないけど、線路を行く者ならそこそこの余興になるだろう。

「なるほど。ありがとうございます」
「このお礼はいずれくださいい」
「え」

電車が到着する。一人で乗り込む彼女を、僕は黒猫と見送った。
立ち去る電車。どこまでも続く線路の上を歌が行く。

さて。月か死か。どちらもそうとは思わなかった彼女は、恋を何にたとえるだろう。

暇な駅バス

駅には時々電車以外の何かが来る。
で、そいつはひび割れたロータリィに入ってくると、石つぶてをばちばち弾いて透明のプラスチックの屋根の下に停車した。ぷしゅーとため息をついてドアを開けると……。

……まあ、中には誰もいなかったんだけどさ。

「昔から聞いてみたかったんだけど、なんで来るの？」
「そりゃまあ、他にすることもないですからねえ」

答えるバスはけだるそう。充電がそんなに心地いいのか。

「最近は暇が増えて商売あがったりですよ。みなさんどうせ時間を潰すならと歩いてばっかりなのですから」

かちかちと憤りにライトを点滅させるバス。けど、雨風にさらされた四角いボディはむしろ小さくなったように見えた。……ああ。昔の記憶と比較してたのか。そりゃ風雨にさらされれば小さくなるよね。

「もっと使ってくれませんかねえ」

ぼやきはいつものこと。僕は苦笑。いったいどれだけの僕たちがそれを思った事だろう。

その願いをかなえてくれる人間たちはもういない。

望まれて、助けるために生まれて、そう在る事に疑いなんか無かった日々。
ああ、なんて懐かしい理想郷。
なのに人間は、なんでいなくなってしまったんだろう。
「まあ。誰だって暇はいやだよねえ」
まったくですと答えるバスに、僕はただただ苦笑した。

流れ着く島

気が向いたので眠っていたら、起きろと言わんばかりの大音量が耳をつんざいた。めきめきめきりごきゃばきゃと軽く大破壊を想像させる音は、デフラグ中だった僕を緊急起動させ、休憩室から駅のホームへと引っ張りだした。そして

「いやー。まだ生きてたんだな、お前ー」

海の向こうからやってくる、鋭角的な鯨（ふね）を見た。

＊＊＊

ゴミの島。なんて呼ばれた頃もあったとか。

当時。衛星削って資源枯渇に備え始めた人類はもはや地球の資源にさほど依存してはいなかった。放っておいても次々に生産される生活必需品。時間当たりの生産数一千万体とも言われるロボットたち。

いやーお前そんなにいるのかよ、なんて誰かつっこんだりしなかったのか。

ただでさえ、地球人工は年々減っていたというのに。

で。そんな中、肩落ち品や壊れたものが押し寄せて生まれたゴミの島。

相対的無限の資源。ゼロに近づく需要の曲線。あぶれた物達は錆びて色あせ軋みながらこの島にたどり着くのだった。

＊＊＊

てなわけで。堆積物で奇妙にうねり膨らんだ海をかき分けて、鋭角的なフォルムも勇ましい軍事用強襲揚陸艦がやってきた。三年ぶりくらいかなあ。

「いやー。まだ生きてたんだな、お前ー」

線路をまたぎ、フェンスをよじ登り、打ち捨てられた機械達の間から生えたたくましくもうっとうしい草をかきわけ海辺によれば、茶色い斑点をたくさん纏った老朽艦が待っていた。

「どうよ、今回は大量？」

船は答えない。……まったく。

仕方ないので、船の周りに漂う、新しいお仲間を観察する。

このあたりの海流を漂う廃棄品をまとめてひっさげてくるのがここ百年ほどのこいつの趣味だ。

で。その戦利品から掘り出し物を探すのが今日の目的なのだった。

「まーそう簡単にいかないけどねー」

……いやこう、色々あるにはあるんだ。だけどどれもみたことも聞いたこともないような物ばっかりで、専門知識がないとちょっと、無理。うん。

それでも半日くらいは飽きずに眺めていた。いちいち検分して、これはなんだろうあれはなんだろうと考えるだけで結構な時間はつ

ぶせるのである。特に今回、こいつの連れてきた数はかなりのものだったので。

「半日もホームから離れていると思ったら、何をしとるんだか」

振り返る。黒猫がいた。

「寝てるんじゃなかったの？」
「寝てばかりいては体が錆びるわ」
「よしよし、たまには錆を落としてしんぜよう」
「さわるでないわ」

前足で叩かれた。

「……しかし、こいつの姿も久しぶりだのー」
「三年くらいだっけ」
「うむ。十年くらいかかるかと思って、気合いを入れて整備してもらったんだがなぁ」
少し寂しそうに、猫は船を眺めた。

今の時代。いずれゴミとなる物を求める者はどこにもいない。
今回の旅は長かった。いったい、どこまで探しに行ってたんだか。
……どこまで探しに行って。
この旅を。
終えようと、思ったのか。

役目を終えて、船はもう答えない。
日が暮れるまで、僕達はその姿を眺めていた。

関係の根幹

ロボット三原則という物があったとか。時の偉大なる科学者が定めたロボットに対して求められる三つの条件である。ちなみに猫は「科学者じゃなくて物書きだ」と言っていた。

xすがに現実では三原則よりも細緻な法が施された。

その中の一つに「ロボットはロボットを作り出してはならない」というのがある。このロボットとは仮想人格を搭載したもののことだ。

なぜロボットがロボットを作ってはいけないか。

人がロボットを完璧に管理するためだ。人が認識していないロボットが現れないようにするために、かのごとき制約が生み出されたのである。ある種の反乱抑止機能だったらしい。

まあ。

今じゃもう、守ってるやつなんていないけど。

＊＊＊

「よーよー。あ、逃げるな」

景気の良さそうな声をあげて近づいてくる、人型ロボット。人間だったら二十歳くらいの女性型。笑顔といい、光を浴びた長い黒髪といい、輝いているところばっかりの女だ。

「ははは。こいつめー。全然顔見せねーで会うなり逃げるとか。自壊でもする気か」

「今まさに壊されそうだよ」
ヘッドロックをかけられながら僕はぼやいた。
「大丈夫。壊しても直したげるから」
「完璧な循環だけど何もかもが間違ってるよ」
飽きたか、彼女はぽいと僕の頭を放した。首をねじって、ホームを見回す。
彼女は小首を傾げた。
「猫は？」
「最近不調でねぇ」
「看たげよっか」
「あいつがいいって言ったらね。ま、パーツがあるかちょっとわからないんだけど」
「ふーん。でもこの間船が帰ってきてたでしょう？　探したんじゃ？」
……なんで先読みされるかなあ。
頬を掻きながら僕は答えた。
「微妙」
「そっかぁ……。困ったね」
彼女はそう言って、身じろぎ一つしない船を一瞥。
まともな部品工場なんてもう無いのに、などとぼやいている。
「さて。猫の話に流されかけたけど、あんたのメンテナンス期間もとーっくに過ぎてるんだからね」

ずびしと指を突きつけてくる彼女は、僕のメンテナンサーである。
かつて僕たちにかけられた制約はプログラム上に確かに残っている。
けれど、だからといって、抜け道が無いわけじゃない。
たとえば既存物の修理扱いにするとか、電源を落とした上でただの物を改造しているだけということにするとか。
結局のところ。法（ルール）というのはあくまで法（ルール）。
僕たちは人と共に在りたかったから人の法を守っていただけで、その法が完璧だったわけじゃない。
そこを勘違いしなければ……僕たちも、つれていってもらえたのかなあ、彼方への旅立ちに。
なとと考えながらも、口では別のことを話していたり。
「僕は止まったらそれまでいいんだけど」
「それじゃあわたしが嫌なのよ。だいたい後味悪いじゃない」
「じゃあしょうがないかあ」
「……納得いかねー。なんでわたしが仕方ない子扱いされるんだ？」
ふと、夜のホームに立っていた恋を探す少女を思いだす。
……様々なルールを作り、多くの事柄を自動化し、自らの手から僕たちへと任せてきた。そしてそんな僕たち自身が、無数のルール（プログラム）で成立している。
それでも。僕たちがやっていける根幹は、好意頼みなんだよな、と。
彼女に手を引かれながら、その事を考えた。

道具の道具

ロータリーではキャンピングカーが待っていた。声をかけても返事は無い。巨大で複雑な機械ほど仮想人格の制御が必須になっていった人類末期だが、こいつはそれを積んでいない。しかしてその理由は、

「いや、わたしプログラミングできないし」

という残念な設計(持ち主)者にある。

テーブルで僕の腕を解体していた彼女は頬杖をついた。じろりと、怪しむように僕を見る。

「突然何？」

「何が」

「あんたが他の奴に興味持つなんてさー」

「言われてみれば。……その点僕達って正反対だね」

彼女は島で数少ない整備士だ。島の住民すべて機械である事を考えれば、その彼女が関わる数は途方もない。一方で僕は、電車も滅多に来やしない廃墟寸前の駅で暇をしているだけ。逆というのなら、これ以上の逆も無い。

「なんで整備士始めたの？」

「んー、境遇？　わたしのモデル人格がそうだったらしいし、家には結構な整備道具があったし、整備についてはよく知らなかったし」

「最後のはどういう因果？」

「素質があるのにできないって悔しくない？」

僕は首を傾げた。
「できたとこでどうするの、それ」
「ばっかねぇ。できることに意味なんか無いのよ。やりたいことやってるっていう充実に価値があるんじゃない」
がしゃん、と背もたれが悲鳴をあげる。彼女は憂鬱そうに息をついた。
「……だから、人がいなくなった途端、みーんな何していいかわかんなくなっちゃったんだろうなぁ」
彼女は透徹した目で僕を見た。
「あんたもそうだったんじゃないの？」
……しかし、申し訳ないがそれは誤解だ。
「僕はその後の生まれだし」
「えっ。そうだったの？　うわー。じゃあ同世代？」
「君よりは年上だよ」
「あんたみたいなのができちゃったからわたしはこうなのねえ」
「いやー。なんだろう。馬鹿にしてる？」
「おお。賢くなったのお、旧世代の分際で」
口にする端から言ってる事が変わってるよ……。
そう指摘すると、彼女は馬鹿にするように鼻を鳴らした。
「だーかーら、それでいいの。過去も未来もここにゃないのよ。わたしは今やりたい事だったりできることだったりをするだけよ。いつまでもね」

本当、刹那的なやつだな。同種のシステムつんでるとは思えないぞ。

まあでも、口にする感想はもう少しまろやかにすることにした。

「……整備なんて、いろんな奴とかかわるだろうに。もっといろいろ考えがあるのかと思った」

するとそのときだけ、彼女はちょっと遠い目をした。

「整備士（道具の道具）に何言ってんの。わたしが道具である事を疑ったら、なんにもできやしないでしょう？」

黒猫の傷

「ごめん、ばっちゃん。わたしにゃ無理。パーツ足りないもん」

テーブルでだれていた黒猫に、彼女は言った。

黒猫はのんきにあくびをして「我が輩も年だしねえ」などと言っている。

「どれくらい保ちそう？」僕は聞いた。

「わっかんね。蓄電の代用ができればねえ。んー」

「いや、それ質問に答えてないけど」

「どうしたらいいのかなあ」

「あー……」

彼女は口をへの時に曲げている。諦めるつもりはないらしい。

まあ……ここが、僕と徹底的に違うところだよな。

僕は黒猫を見た。黒猫もこちらを見る。

「無理なら無理でいいんだよ」黒猫は言った。

「うっせー。無理ってのは未来なのよっ。未来なんかわたしが知るかっ」

……不思議だなあ。一つ一つの要素は全部正しいはずなのに、なんでつなぎあわせるとこうも理不尽に聞こえるのか。

「あっ。そうだ！　じっちゃんなら何とかできるかも」

「なんとかなりそうなの？」

「わかんねー」

けど、その割に、答える声は明るかった。

＊＊＊

ということで、じっちゃんに会いに行く事になった。じっちゃんが何者なのか、なにをどうするから何とかなるのか、まったく想像がつかないが、気づけば発車していたのだからしょうがない。

鼻歌こぼしてハンドル握る彼女、は放置して、僕と黒猫はキャンピングカーの整備室部分の床にぺったんと座ってる。整備道具がぎっちり詰まっているせいでスペースは狭い。車が上下する度、どこかがパレード状態になった。

「お前にしては強硬な手をとったね」

猫が言った。何のこと、ととぼけてみる。

「ふん。シグレを呼んだのお前だろう？　だいたい、半日もかけてパーツ探してるところをみてりゃ想像がつくわい」

それは単に、最近ずーっと寝てばっかりで相手してくれないつれない相棒の代わりの暇を探してただけです。わざとらしすぎたので言うのはやめた。

「僕も最近調子悪かったからね」

「お前は滅びるに任せるタイプだろう。わたしとおんなじにね」

「そうねえ」

「我が輩に生きてほしいのかい？」

僕は答えず、質問で返す。

「饒舌だね。何を話したいの？」
黒猫はしっぽをふらりと揺らした。
「シグレは苦手なんだよ。まるで人間みたいだ」
「人間ってあんなだったの？」
……うーん。機械達はなんであんなややこしいのが好きだったんだけう。正気を失ってたとか？
黒猫は笑った。
「恋は盲目って言葉がある。まさにそれだったんだろうさ」
夜の駅ですれ違ったあのロボットを思い出した。
彼女は確かに、盲目と言えるほど視野が狭かった。
「でも、人間みたいなら、好きなんじゃないの？　好きだったんでしょう？」
「好きだったさ。けど、向こうにとってはそれほどでも無かったんだよ」
「……ああ」
人類に取り残された事。
それは黒猫にとっては未だ癒えていない、盛大な傷跡（失恋）なのか。
……こっそりと、心の中だけで笑みをこぼす。
だからこそ、まだまだ黒猫に生きて欲しいんだよ。

理由探求

車に揺られて一時間。海から離れ、島の内側へ入ってく。このあたりは廃墟風景もひと段落。小鳥のさえずりが耳を潤す緑の光景に満ちている。

聞きかじりの思い出がある。
ここはかつて最後の人類が暮らした場所。
会った事はないけれど、僕を作ったのも彼女だそうだ。
今はこの森のどこかで眠っている。
享年三百十四歳。立派なサイボーグだった。

そんな彼女は、僕以外にもたくさんの機械を生み出した。
これから訪ねる「じっちゃん」もその一つである。

＊＊＊

「帰れ」

ログハウスから出てきたやつは化石寸前の顔をしていた。

「帰らないからどうにしてよ」

嵐のような押し問答はシグレに一任して、僕は木陰で一休み。膝を伸ばして座り込み、ぽけっとする。すると黒猫が膝の上にやってきて、あくびをしながら丸くなった。

「眠いの？」
「ここは光が届かないからねえ」

「ああ。発電」

しかし僕達が発生させている電磁波で多少は発電できるはず。死ぬ事はあるまい。

「そういえば、じっちゃんって誰か知ってる？」
「知ってるよ」黒猫はこちらを見る。「初めて？」
「うん。会った事もない。怖そうな感じだね」
「大した奴じゃない。……ああ。お前にどこか似てるかもねえ」
「どんなところが？」
「引きこもってるくせに、誰かが訪ねてくるのを待ってるところ」
「ははあ。面倒くさそうな奴だね」

あれ。黒猫がなんか小さくなった。

＊＊＊

ざくざくと草を踏みつけながら、じっちゃんがやってきた。小太りの小男をそのまま拡大したみたいな姿だった。

「お前は誰だ」

じっちゃんは聞いた。僕は肩をすくめた。

「こいつの飼い主」
「なんの酔狂だ。こいつは人以外になついたりするやつじゃねえ」
「あ。人にはなついてたんだ。やっぱり好きだったんだねえ」

背中をなでると、尻尾で叩かれた。じっちゃんはそれを不思議そうに見ている。

「お前もそいつを直したいのか？」
「あはは。そうね」
「嘘だな」
「うん。嘘」

言葉を交わせばすぐにわかる。こいつは僕と同類。
だから、自分の気持ちなんてわかっちゃいない。

「正直、俺は嫌だ」
じっちゃんは腰を下ろしながら言った。
「生きたくもない奴を生かすのはおもしろくない」
「だろうね」
「お前は何でそいつと関わってるんだ？」
「まだ生きてるからでしょう」

今まで生きてきた。そして今も生きている。それだけが僕がこの黒猫について知っていること。

愛着はある。いなくなったらきっと寂しいだろう。もう二度と動かない錆付いた船を6思い出す。その絵は、ホームで丸くなったままぴくりともしない黒猫に変わる。僕はずっとそれを見下ろすのか。
想像すると胸が痛んだ。

けれどそれだけ。

だからなんなのと思ってしまえば、僕の気持ちはあっと言う間に見えなくなる。空気みたいなものだ。
それに比べれば、じっちゃんはちょっと不純かな。

「嫌だって言うけど、なんで嫌になったの？」

じっちゃんは顔をしかめた。

僕は笑った。

「こうあってほしいという思いがあった。……もしくは、今でもそれがある。そうでなきゃ、嫌だなんて言えないよ」

そしてこの黒猫も。

……捨てられて、こんなところに流れ着いても死ぬことを選ばない。

漫然と時が過ぎるに任せて、判断を先へ先へと後延ばしにしているだけ。

でもそれは、迷う夢があるということ。

駅のホームから送り出した、一体の機械を思いだす。

恋を探し続ける彼女。

人を知り。人に捨てられ。盛大な失恋に派手に傷ついて、今でもずるずる引きずって、こんなところに集まったまま未だにさまよい続けている。

この島に集まった者はみんなそう。

人間を知らない、僕以外。

だから。

僕もそれを、知りたいと思ったのだ。

「どうしても嫌ならそれでもいいよ。でもその代わり、嫌な理由を教えてもらうまで僕はしつこくつきまとう」

どっちにする？

じっちゃんはため息をついて、黒猫を抱えていった。

……こういうのも、北風と太陽っていうのかな？

猫はそうしてやってきた（偽）

「いつから一緒にいるの？」

木陰でぼんやりを続行してると、日差しの代わりに影と声が落ちてきた。仁王立ちの彼女だった。

「そろそろ十八年？」

「……ごめん。聞き方間違えた。二人のなれそめは？」

「船が連れてきたんだよ」

あのころは年に一度は戻ってきた。

黒猫を見つけた時は「これだけ盛大に塩水かぶっちゃ復活の見込み無いよねえ」と言ったものだ。

が、船にぶおーと怒られたので、ものは試しに洗濯ばさみで吊してみた。

ふぎゃーと復活した黒猫には盛大に引っかかれた。

「以来、同じ場所に居座ってる感じ」

「あんたの事だからろくに話しかけたりもしなかったんでしょうねえ」

「お互い非干渉だったねえ。引っかかれたりはたかれたりする以外」

「……案外手を出してたんだ」

そうかもしれない。

なんかむずがゆくて頬を掻いた。

「向こうも時々は話しかけてきたりしたし。お互いそれなりに暇つぶしの相手にはなったんじゃないかなあ」

「あんたにとって、あいつってどういうやつ？」
「口が悪いよね」
「それから？」
「なつかない」
「それから？」
「時々怖いことを言う」
「……わたし、あんたらがなんで相棒やってられるのかよくわからないわ」
彼女は頭を抱えた。
「相棒ねえ」
「違うの？　それだけ一緒にいながら？」
じろりと向けられた目。何か、粘っこいものの混じった光が混じっている気がする。
「違うと思うよ。お互いに都合よくはあったけど、お互い必要ってわけじゃなかったし」
僕も黒猫も、一人でいようとすればいられるだろう。それでもいいやと、何事も諦められるから。
……違うか。
僕もあいつも、自分の思ってる一つの事以外は切り捨てられるってだけなのだ。
切り捨てられないものはなんだろう。
考えてみる。すぐに見つかった。それは習慣の中にある。
たとえばつれない態度。誰かにしかなつかないと決めているような頑なさ。
何度も海辺を散歩する黒猫。何かを探しているように。

……あいつにとって、自分を運んできた船がそこで朽ち果てようとする景色はどんな風に写ったんだろう。
もうあいつが、何かを新たに運んでくる事はない。その事実をどう捉えたのか。

一つの夢が終焉を迎えた。
それは毒のように、病気のように、この島に広まっていく気がする。

「あいつは何を求めてたんだろうなあ」

だから気になる。
どうせいつかは終わる関係。いつかは果てる体。
そこに何を宿していたのかを。

「あんた、そんなに積極的だったっけ？」

彼女は眉を持ち上げる。
僕はスルー。理由はわかりきっていたからだ。

＊＊＊

夜になって、じっちゃんは言った。
「駄目だ。直せない」

猫はそうしてやってきた（真）

骨のきしみが聞こえ始めたのはいつからか。
つい最近の事ではなかった。海に漂い、記憶が漂白される遙か前から、その音はずっと隣にあった。
けれど無視していた。直せないのはわかっていた。

世にあるものはすべて滅びる。
それが自滅の言い訳にならないのは知っている。滅びるからと言って滅びてもいいやと何もかもを諦めていたら、生あるものに許され．選択肢は生まれた瞬間から自殺だけだ。
わたしはそれでもよかったけど……。

「調子が悪かったらすぐに言ってね」

ずっと昔。余命一月と言われた子にそう言われてしまった時から。
『わたし』は『我が輩』をすることにした。

骨のきしみが聞こえ始めたのはいつからか。
つい最近の事ではなかった。海に漂い、記憶が漂白される遙か前から、その音はずっと隣にあった。
けれど無視していた。直せないのはわかっていた。わかっていたから、隠し続けた。

＊＊＊

無理、とじっちゃん――もとい、ユアンは言った。
ユアンはオリジナルのパーツを作る偏屈だ。いや、偏屈というの

は穏やかに過ぎよう。
そう。ユアンは死体を次ぎあわせて異形を作り出す狂人である。
現代では、ＣＢはＣＢを作ってはならない、などという人間の決めたルールを遵守する者はほとんどいない。けれどやはりそんなことはしないとする者がほとんどだ。
仮想人格。複雑なシステムを制御するための、人格をモデルにしたシステムである。ＣＢとは仮想人格を積んだ機械を指す。
人間をモデルにしているだけあって、ＣＢは少し変わった癖を持つ。たとえば、自分の体に手をいれる事に嫌悪を感じるという具合に。
ユアンはその制約を突破した希有な例だ。本来別の型に入るべき仮想人格が人型のハードに入ったからのバグだという。
故に彼の手は、普通のＣＢより遙かに緩やかな制約しかなく。
その手ですら、我が輩の部品が作れなかったのだ。
「そうかい」
ユアンに無理と言われたとき、我が輩はそう返した。それ以上の言葉は持たなかったし、まあ、こんなものかな、という気もしたからだ。
我が輩をこの島につれてきたあの船が、声一つ上げずに海辺に横たわったあの時に思ったのだ。
『ああ、その時が来たんだ――』
しばらく物思いに耽っていると、ユアンは我が輩を抱きかかえて

外に出た。シグレと、そういえばまだ名前も聞いたことのない男のCBが、ユアンの説明を聞いている。
シグレは見る見る険しい顔つきになっていく。彼女には諦めの二文字は無いのだろう。それはそれで希有な在りようだ。まるで人間のよう。
それが懐かしく、疎ましい。
思い出が楽しければ楽しいほど、それに手が届かないというのは深く胸をえぐってくる。

ユアンとシグレが相談に……というより、シグレがユアンにかみついているのを後目に、我が輩は彼の膝の上に丸くなった。彼の体は暖かい。電気を無駄にくいそうだ。

「ということらしいよ」
「そうだね」

返事はいつも通り淡泊だ。撫でてこようとしたので、尻尾で叩き落とす。

「お前はどうするんだい？」
「君はどうしたいの？」

残るのは沈黙だけ。
いや、ユアンとシグレの言い争う声。

「まあ、こんなもんだね。元々長生きしすぎたんだ」
「かもね。どうだった？」
「微妙だね。あんたも退屈な奴だったし」
「散々叩いておいてそれかぁ……難しいね、猫って」
「自分でないもんは、すべからく難しいもんさ」

ふうんと、気のない返事。わりかしいいこと言ったと思ったんだけど。

これだからつまらないというのだ。

「まあ。どうしようもないね」

「そっかぁ……」

我が輩は顔を上げた。

なんとなく、声の様子が、いつもと違う気がした。

「どうしようもない、のかなあ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6222y/

海里の果て

2011年11月21日21時43分発行